

あこや姫伝説の諸相——説話から縁起へ

はじめに

人が異類と契りを結ぶ話、いわゆる異類婚姻譚は、洋の東西を問わず数多く残されている。昔話の「鶴女房」や「蛤女房」などはその一例である。こうした異類婚姻譚に登場する異類は、何も動物だけではない。樹木の精霊もまた、異類婚姻譚に欠かせない存在なのである。樹木の精霊と人間が契りを結ぶ話は、『今物語』第二十六話や御伽草子『かざしの姫君』などに見られ、古くから普遍的な話型であった事が窺える。本稿で扱う山形県山形市に残されているあこや姫伝説も、樹木の精霊と人間の異類婚姻譚を軸としている(1)。現在伝えられているあこや姫伝説の梗概を左に示した。

出羽国の領主である藤原豊充の娘あこや姫の元に、夜々美青年名取左衛門太郎が訪れ二人は懇ろになる。ある晩、青年は「自分分は実は千歳山の老松の精霊である。明日名取川に架かる橋の材料となる為に伐られるので、お別れに来た」と言って消えてしまう。翌日、あこや姫が千歳山に行くと見ると、確かに老松

鬼頭尚義

が伐られており、運び出す最中であつた。しかし大の男たちがどれだけ挽いても松は動かなかったが、姫の手にかかると松はスルスルと動き出して、無事に名取まで運ぶことが出来た。その後姫は出家し、千歳山に庵を結んだ。そしてそこに若い松を植えた。これがアコヤノ松であり、姫が結んだ庵が萬松寺である。萬松寺に移り住んだあこや姫は、辞世の和歌として「消えし世の跡とふ松の末かけて名のみは千々の秋の月影」を詠み、慶雲四年(七〇七)に亡くなった。また一説には、あこや姫は藤原豊成の娘で中将姫の妹とも言われている。父豊成が流罪になった際、あこや姫は近侍の者とともに出羽国平清水へと落ち延びた。あこや姫は当地で亡くなる。姫の遺言に従って、遺骸は千歳山に葬られ、その印として松を植えた。これがアコヤノ松である。

このようにあこや姫伝説は、一条朝の歌人である藤原実方が歌枕巡見の際に捜し求めたアコヤノ松の由来譚も兼ねている(2)。そして伝説の舞台であつた事を示すかのように、千歳山万松寺の境内に

はあこや姫の墓が安置されている（写真）。



写真 あこや姫の墓（右側）／左は藤原実方の墓

あこや姫伝説は山形を代表する伝説であるため、これまでも数多くの論が出されてきた⁽³⁾。その中で菊地仁氏は、あこや姫伝説を次の二系統に分類している⁽⁴⁾。

- ① 豊充系（木霊婿入譚）
- ② 豊成系（中将姫説話）

菊地氏は①の豊充系は山形にある曹洞宗の寺院である千歳山萬松寺の縁起を書き記した元文二年（一七三七）成立の『元文二年書上』

に、②の豊成系は寛政四年（一七九二）成立の『補出羽国風土略記』に、それぞれ初出が見られる事を指摘している。また現在では①の豊充系が主流となっているが、江戸時代から明治時代までは①・②の両系統が並存しており、①が台頭しはじめたのはごく最近の事であると論じている。

しかしながら菊地氏の論考においても、あこや姫伝説の形成背景や、千歳山萬松寺の縁起に取り込まれていった過程などについては、十分に論じられてはいない。果たしてあこや姫伝説はどのようにして形成され、どう変貌していったのか。また伝説の形成・展開に、伝説の残る萬松寺や平清水の人々はどのように関わっていったのか。以下、詳しく見ていこう。

一 創出される伝説

あこや姫伝説の初出について菊地氏は、萬松寺の縁起を書き記した『元文二年書上』（以下『書上』の省略する）に見られると指摘しているが、果たしてそれ以前には確認出来ないのであろうか。

伊勢国射和の俳諧師大淀三千風が編纂した『日本行脚文集』は、三千風が全国行脚をした際に集めた各地の伝説が数多く残されている。三千風が貞享三年（一六八六）の九月に出羽国を訪れた際に書き記した、以下のあこや姫伝説は看過できない⁽⁵⁾。

ある俗翁のいはく、いつの大古にやあらむ、みちのく名取の左右衛門太郎といふ葛籠負、渡世の業に都がよひせしが、仮の舎の床さびしくや、一條西ノ翁の可愛女あこや姫に密言し齷齪が、何時しかあき風立ちてうるさき露の古郷に逃げて来にけり。

姫姑ましき一念を足になして、背が里も近く漸々現心になりて、細河を見つげ、流石に脚か、げんもあな恥かしと、思ひのせち心水社にやこたへけん、はや波下をくぐりて中津瀬のみ乾きて、今に恥かし川といへり。その山の岫に一株の松あり。此の木がくれに千歳は経とも、いにしへ人に逢ぬかぎりは出もやらじといひしより、千年山といひ、松を阿古屋とはよばれぬ。かくていらち心に狂ひまどひ、みちのく笠島といふ所にして身まかりぬ。其の胸はしり火の魄余波で、さとしどもおほかりければ村長はからひなだめて、道ゆきぶりの早速しければとて、道祖神とは鎮めたり。

(傍線および番号は私意。以下同じ。)

京都の一条西にすむ翁の娘「あこや姫」と、みちのくの商人「名取左衛門太郎」を軸とした話である。ここでアコヤノ松は、あこや姫が願を掛けた松として、その由来が記されている。一読して、現在伝えられている木霊婿入譚とは別の筋書きで展開されている事がわかる。

さて『日本行脚文集』で注目すべきは、あこや姫伝説が名取市笠島に鎮座する笠島道祖神の由来譚(縁起)となっている点である。笠島道祖神といえば、『源平盛衰記』に収められている次の説話が想起されよう⁽⁶⁾。

奥州名取郡笠島の道祖神に蹴殺されにけり。実方、馬に乗りながらの道祖神の前を通らんとしけるに、人諫めて言ひけるは、「この神は効験無双の霊神、賞罰分明なり。下馬して再拝して過ぎ給へ」と言ふ。実方問うて曰く「いかなる神ぞ」と。答へけるは、「これは都の賀茂の河原の西、一条の北の辺におはする出雲路の道祖神の女なりけるを、いつきかしづきて、よき夫に合せんとしけるを、商人に嫁ぎて親に勘当せられて、この国へ追下され給へりけるを、国人これを崇め敬ひて、神事再拝す。

ここで『日本行脚文集』のあこや姫伝説と『源平盛衰記』の笠島道祖神説話を比較してみよう。両話には、女の出目が一条の近辺である点⁽¹⁾、男の素性が商人である点⁽²⁾、物語の舞台が名取笠島である点⁽³⁾、そして女が笠島道祖神として祀られる点⁽⁴⁾など、共通の要素が数多く見受けられる。また、山形の伝説であるにも関わらず、京都の詳細な地名が記されている点も看過できない。すなわち、『日本行脚文集』に見られるあこや姫伝説は「俗翁曰」

の在地伝承ではなく、一定水準以上の知識を有した人物によって創作された伝説である可能性が高いと言えよう。今このあこや姫伝説を菊地氏の分類に倣って、一条翁系（笠島道祖神縁起）あこや姫伝説と呼ぶ事とする。

この一条翁系（笠島道祖神縁起）あこや姫伝説は、享保二年（一七一七）に幕府の巡検使として奥羽を訪れた有馬内膳が記した『享保二酉年奥羽二州巡見日記』にも記されている⁽⁷⁾。

一説天平の比、陸奥に名取郡左衛門太郎とてまづしき商人有。年毎に都へ登り二条通西の岡宿の翁の娘阿古屋といひける、仮初馴初契深かりしに、世の人心かはりやすく、うとましく成けん、左衛門太郎は故郷え帰ける。阿古屋も二とせ三とせは待けれど、それと斗の音信もなければ、待わびかなしき心にも恨めしと思ふ心のをにとも成べき程なれば、廿日にあまる旅路を三日四日、出羽の国に來りて尋ねぬ隈もなければ、左衛門太郎にはあはざりければ、彼方の山の松陰に立より、彼千とせは経るともあはぬうちには此松の下を出じといひしより、山を千とせ山といひ、松を阿古屋といひけると云あへる。左衛門太郎はむつの国の名取の郷にあるよしいひける、嬉しく思ひて尋ね行しに、二とせいせんに身まかりけると聞て悲みに絶ず、阿古屋も程なく狂ひ死けり。その晝夜毎に出て里人をなやまし、不思議の事

のみ多く、されば胸の壺火さかむにして道行事のさかく敷を、所の者ども道祖神と崇。其社同郡の笠島といふ所有。

実際に出羽国を訪れた役人が日記に記している事から、一条翁系（笠島道祖神縁起）あこや姫伝説は地元の人々にも受け入れられていたと思われる。創作された可能性が極めて高い一条翁系（笠島道祖神縁起）あこや姫伝説は、十八世紀前半頃までには出羽国において在地伝承化していたと言えよう。

ここで注意しなければならないのは、一条翁系（笠島道祖神縁起）とは異なるあこや姫伝説も存在していたという事である。先に示した『享保二酉年奥羽二州巡見日記』には、以下のあこや姫伝説が併記されている。

千歳山阿古屋の松の説、異説區々有中に、飛鳥井中納言出羽国へさすらへ侍りぬ。彼妻歎にたへずあこがれ身まかりぬ。其娘阿古屋の前とかやいひ侍りぬ、母の別れをかなしみ、父にあはむため彼国に尋來りて身まかりけるま、印に植し一木を阿古屋の松といひならはし侍るよし。

飛鳥井中納言の娘「あこや姫」を主人公とした話である。このあこや姫伝説では、いわゆる貴種流離譚が軸と成っている⁽⁸⁾。ここ

ではアコヤノ松の由来は、出羽国で身罷ったあこや姫の為に植えられた松とされている。このあこや姫伝説を飛鳥井中納言系（貴種流離譚）のあこや姫伝説と呼ぶこととする。飛鳥井中納言系（貴種流離譚）は、先的一条翁系（笠島道祖神縁起）と併記されており、十八世紀前半ころまでは二系統のあこや姫伝説が並存していた。

以上のように、木靈婿入譚以前のあこや姫伝説には、一条翁系（笠島道祖神縁起）と飛鳥井中納言系（貴種流離譚）の二つが存在していた。特に一条翁系（笠島道祖神縁起）は、笠島道祖神説話に見られる要素が入り込んでおり、創作された可能性がある話であった。

二 萬松寺縁起への内包

前章で述べてきたように、形成当初のあこや姫伝説は、現在伝えられている伝説とは全く異なる内容を有していた。さて萬松寺の縁起としてのあこや姫伝説は、菊地氏が指摘するように、萬松寺の縁起を記した『書上』に見る事ができる。それでは、萬松寺とはどのような寺院なのか。萬松寺の来歴を記したものに、『千歳山萬松禪寺誌』という資料がある⁽⁹⁾。この資料は萬松寺が発行したものであり、そこに記されている来歴には虚実入り混じっている部分も散見される。しかしながら、萬松寺の来歴を記したほぼ唯一の資料である事を鑑みて、以下『千歳山萬松禪寺誌』を用いながら、萬松寺

の来歴を確認していく。

『千歳山萬松禪寺誌』によれば、萬松寺はあこや姫の開基に始まる。その後行基が来訪した事によって法相宗となり、更に円仁が来訪した際には天台宗へと改宗している。さらに祖庭春暁という臨濟僧によって臨濟宗の寺院としてその宗派を変え続けた。

萬松寺が現在の曹洞宗となったのは、十四世紀末の事であった。すなわち永徳年間（一三八一～一三八四）に奥州黒石正法寺三世の清厳良浄が萬松寺に入った事により、曹洞宗へと改宗された⁽¹⁰⁾。

清厳良浄によって曹洞宗の寺院となった萬松寺は、再び荒廢の憂き目に遭った。その後、文明年中（一四六九～一四八七）に千歳山耕龍寺五世金貞恵真によって中興されて以降、萬松寺は曹洞宗の寺院として今日に至る⁽¹¹⁾。また江戸時代以降は、徳川幕府から度々御朱印を賜わっていた。

さて萬松寺の縁起については、十八世紀以前のものは今のところは確認できない。現在確認できる最も古い縁起が、元文二年（一七三七）に成立した『書上』なのである。『書上』の成立事情については、その序文において以下のように書き記されている⁽¹²⁾。

今度千歳山萬松寺縁起御尋遊され候処、往古寺消失並頽転シ、盜難度々之変事御座候節、紛失し候旨申伝候。茲に因て若相殘候も御座候哉と穿鑿致候得共、何二ても古き記録も相見申さず

候。縁起御座無候ハゞ、所の老農申伝候事成共、申上候様に仰付られ候故、ふつ、かなる事のみ御座候得共、猶又此度彼是承合奏勞趣左に申上候。

(適宜書き下し文に改めた。また旧字体は現行の字に改めた)

元文二年、山形藩に萬松寺の由来を尋ねられたが寺院の焼失や寺宝の盗難などが重なって古い縁起がない状態だった。しかし地域の老人らの言い伝えでも構わないので進上せよとの仰せが下ったので、それを纏めて書き記したものが『書上』である。

まず、『書上』を記した人物について確認しておく。『書上』の末尾には、「久左衛門」という名が記されている。この久左衛門とは、平清水久左衛門という人物である。平清水氏は、千歳山萬松寺のある平清水一帯の大庄屋を勤める家柄であり、佐久間氏とも名乗っていた。また四代目以降の当主は皆、「久左衛門」を名乗る事が慣例となっていた。平清水家(佐久間家)の系図について、元文年間に八代目久左衛門が山形藩に提出した「覚書」には、以下のように記されている⁽¹³⁾。

私先祖無役之郷士ニ候而、当城主様江三代御目見仕、四代目ヨリ御頼ニ付、御役儀相務申候
最上出羽守様御代 下野義行

慶長年中

(中略)

堀田下総守様御代

久左衛門義青

貞享二乙丑年ヨリ相勤申候

久左衛門政喜

御当家様

久左衛門政喜

元禄十六癸丑年ヨリ相勤申候

久左衛門義明

御当家様

久左衛門義明

享保十二未年ヨリ相勤申候

久左衛門義明

この「覚書」の記述から、『書上』を記した久左衛門とは八代目に当る久左衛門義明であった事が分かる。

それでは、『書上』に記されている「老農申伝候」話とは、どのような話なのか。十八世紀前半には一条翁系(笠島道祖神縁起)および飛鳥井中納言系(貴種流離譚)のあこや姫伝説が流布していた事を考えれば、「老農」らが言い伝えた話は、そのどちらかである可能性が高い。しかし、実際に『書上』に記されているのは以下の話である。

寺号は開基阿古屋姫より起り候由相伝候。其由縁は上古いづれの公卿に御座候哉、奥州信夫郡辺に謫居被成候中、姫君誕生之処、美貌の御うまれゆへ、御父の御卿も御称美の思召にて、

阿古屋の玉の佳名を御取用ひ、阿古屋姫と御名づけのよし。然
 処姫君も御年つもりて後、閑閑さびしく思召程、夜々一人の男
 子来りて懇にとぶらひ候に、終に夫婦の契約有之。年月を被為
 送候処、一夜又此男来りて姫君へ申し候は、是まではつ、み候
 得共、元来我は松の精に候を、今時至て橋木に成御筈ゆへ、同
 床のかたらひも今宵ばかりと思ふ也。去ながらむつび候し
 には、縦伐て倒とも其時姫君御手かけられず候はゞ、動き申ま
 じと語り候ゆへ、姫君も奇怪に思召事大形ならず候処、翌日果
 して約に違ふ事無之、其松を伐り数人にて挽候得共更に動き不
 申候間、所之者不審に存うらかたなど尋候上にて、姫君を頼み
 挽候に、御手かゝり候へば大木不滞候て、高低の遠路を挽着候
 に、其道すがら松と姫君さゝ、やきの聞へ候に付、所之者猶も奇
 異なる事に覚候て、夫より其橋を蜜語の橋と名づけ、今に信夫
 郡辺に 御座候由。其後姫君程なく卒去之処、御遺言にわが屍
 骸は当国の名山に納め、墳上に松を植へしと被仰候ゆへ、千歳
 山迄送り唯今の阿古屋の地に葬埋仕候て、御遺言のごとく植候
 松を、阿古屋の松と申し候旨。其時阿古屋姫御追福のため寺も
 建候歟、此由縁にて千歳山万松寺と号を申伝候。(中略)

久左衛門

以下『書上』は、藤原実方がアコヤノ松を探す話、そして実方の

娘である「中将姫」が父・実方を追いかけてくる話が続けられる⁽¹⁴⁾。
 『日本行脚文集』などに見られたあこや姫伝説と大きく異なるの
 は、『書上』では萬松寺の縁起として機能しているという点である。
 そしてあこや姫伝説の内容も、

①あこや姫と松の精霊「名取左衛門太郎」の婚姻譚

②あこや姫の手によって大木が曳かれる話

この二つを軸として話が展開している。

まず①に見られる人間の女と木の精霊が契を結ぶという話は、先
 述の通り『今物語』や御伽草子『かざしの姫君』などに見られ、普
 遍的な話型であった事は言うまでもない。

また②については、男女の違いこそあれ『三十三間堂棟木由来』
 に代表される「特定の人物によってのみ曳かれる大木」の話型を有
 しているといえよう。さらにこの話型については、菊地仁氏が東北
 地方の民間芸能である山伏神楽の『橋引(橋掛)』にも見られる事
 を指摘している⁽¹⁵⁾。さらに菊地氏によれば、同様の話型を持つ伝
 説が福島県や秋田県・岩手県など東北各所に残されているという。
 ①同様に②も東北一帯では普遍的な話型であったと言える。

このように『書上』では、一条翁系(笠島道祖神縁起)や飛鳥井
 中納言系(貴種流離譚)とは全く違う、普遍的な話型を組み合わせ
 た形のあこや姫伝説が書き記されているのである。それでは、なぜ
 『書上』においてあこや姫伝説は変化しているのか。そこには、『書

上」が萬松寺の縁起を書き記した資料である事が大きく影響している。すなわち、従来的一条翁系（笠島道祖神縁起）では笠島道祖神の縁起を語っており、萬松寺の縁起として相応しくないものである。そこで、あこや姫伝説を萬松寺の縁起として相応しい内容とするため、普遍的な話型である①と②を組み合わせた木靈婿入譚としてのあこや姫伝説を創作した可能性が考えられよう。

それでは、誰が『書上』におけるあこや姫伝説の創作に関与したのか。もちろん、筆者である平清水久左衛門義明が関与していた可能性は大いにある。義明は元文年間に、萬松寺にほど近い場所にある唐松観音の再建や耕龍寺の移転に尽力している⁽¹⁶⁾。義明のこうした事蹟を踏まえると、萬松寺の縁起である『書上』を書き記す際、あこや姫伝説を創作した可能性も十分に考えられる。

あこや姫伝説の改変に関与した人物については確証を得ることは出来なかったものの、ここでは『書上』に見られる木靈婿入譚としてのあこや姫伝説は、決して古老の言い伝えをそのまま書き取ったものではなく、普遍的な話型を組み合わせた伝説である事を確認しておきたい。

二 変貌する伝説——縁起と俗伝の狭間で

前章で論じたように、十八世紀中頃にはあこや姫伝説は萬松寺の

縁起に取り込まれ、木靈婿入譚へと変化していくのであった。それでは、あこや姫伝説の原型ともいえるべき一条翁系および飛鳥井中納言系のあこや姫伝説はどうなっていたのか。

宝暦十二年（一七六二）に幕府の巡見使として奥羽から松前を巡見した宮川直之が書き記した『奥羽並松前日記』は、奥羽地方と松前に伝わる古事・来歴も記されている。宮川直之は平清水付近も訪れており、長谷堂村で一宿していった。そしてその際に「長谷堂村亭主」から貰った「右書付」を、『奥羽並松前日記』の中で記している⁽¹⁷⁾。

出羽国千年山阿古やの松の事、異説區々申伝へる中に、飛鳥井中納言出羽の国へ左遷人と成給ひ、彼北の方あくがれ終に身まかり給ひぬ。其娘君あこやの前、母の別れを悲しみ父に■すいトセたきとて、此吾妻にたづね参り、爰にてむなく成給ひしるしのひと木をあこやの松と唱へ申よし。又或説に、天平の比陸奥名取郡に左衛門太郎とて貧しき商人の、年ごとに都へのほり、二条西の翁といへる者を宿としてけり。其女メあこやとい、けるに、仮初に相馴借老の契り深かりしに、いつの間にかは秋風の、左衛門太郎は故郷へ帰りけると、あこや二とせ三とせ待わび音信さへなかりけり。且はうらみ且はいかり一念に二十日余り長の長途を三四日の日数に出羽国に下り、さま

ぐ尋けれども、それとするべなかりければ、われせこに逢ん限り千年と経るとも此松の木の下を出でもやらじと誓ひしより、山を千とせ山、松をあこやと後人詠じとなん。しかるに陸奥名取郡に左衛門太郎ありと教ゆるものありて、尋ね行しに二とせさきに身まかりぬると聞付、更の愁ひやるかたもなし。あこやも程なく狂死し、霊こん夜なく里人をおびやかし、往来の人に障り、不思議なる事ども多かりければ、処のもの道祖神と崇め、其祠同郡笠嶋といふ所にあり。(中略)

右書付長谷堂村 亭主より貰ひもふす。

「右書付」に記されていたのは、紛れもなく一条翁系(笠島道祖神縁起)および飛鳥井中納言系(貴種流離譚)のあこや姫伝説である。元文二年以降、萬松寺縁起として新たなあこや姫伝説が創出されていく一方で、一条翁系(笠島道祖神縁起)のあこや姫伝説は依然として村の言い伝えとして残されていたのであった。

こうした村の「俗説」レベルのあこや姫伝説が存在する中で、萬松寺縁起としてのあこや姫伝説は、どのように展開していったのであろうか。

先に挙げた『奥羽並松前日記』の筆者である宮川直之は、長谷堂村で一泊した後に千歳山萬松寺を訪れている。そしてその際「萬松寺和尚ヨリ左ノ書付」を貰っていた。

千歳山萬松寺二石碑アリ

萬松院阿古屋法尼 当山開基

又萬松寺和尚ヨリ左ノ書付ヲ貰フ

抑あこや姫は大識冠鎌足公の末孫、中納言藤原の豊満卿の姫君也。此国二下りて儲け給ひしなり。不斗ひとりの男夜毎二あひ馴て深く契りを結び給ふ。或時姫聞て、此年月深く馴染まいらせしおこは、いづく名は何と尋ね給ひけるに、名取左衛門太郎と答えて、又或夜物語に、我ハ此千年山の松の精也。然るに名取川の橋の修理に翌伐れ侍る。されども魂とまりて、引とも動くまじ。其時里人に替べし。御身出て引給ふ時は、安くまいるべしと約しけるに、はたして言葉に違はずなんありける。里人姫君をたのみけるに、姫綱二手をかけ給へば、安らかに名取川まで引付たり。此時今の笹谷峠を通りけるに、姫此松と道々さ、やきけるにより、私語峠なりしを、今に称してさ、や峠といふ習せり。

萬松寺の和尚が手渡した「書付」には、アコヤノ松の由来こそ書かれていないものの、いわゆる木霊婿入譚としてのあこや姫伝説が記されている。その意味では『書上』以来のあこや姫伝説を受け継いでいると言える。しかしながら、「書付」は決して『書上』をた

だ書き写しただけのものではない。両者の違いを比較してみよう。

表…『書上』と『書付』の比較

	『書上』	『書付』
1	父親の素性	奥州信夫郡の公卿
2	父親の名前	藤原鎌足の末孫 藤原豊満
3	男の名前	名取左衛門太郎
4	男の素性	千歳山の松の精霊
5	地名由来譚	密語橋 笹屋峠(ささやき峠)
6	アコヤノ松	姫の遺言で植えた松
7	萬松寺由来譚	姫の菩提を弔う為の寺院 姫が開基した寺院

『書上』ではあこや姫の父親およびあこや姫と恋仲になる男性の名前は記されていない。しかし『書付』では、現在残されている伝説と同じく、父親の名前を「藤原豊満」(豊充の当て字か)とし(2)、男の名前も「名取左衛門太郎」としている(3)。また『書上』では話の舞台が信夫郡から唐突に千歳山へと変わっていったが、『書付』では松そのものが千歳山の松とされる事(4)で、話が円滑に千歳山へと移行できる配慮がなされているといえる。

更に萬松寺由来譚においても、『書上』ではあこや姫の菩提を弔う為に建立された寺院であった。それに対して『書付』では、あこや姫が開基した寺院として記されているのである(7)。あこや姫

自身が開基した寺院とする事によって、萬松寺とあこや姫伝説はより密接に結びつけられているといえよう。

このように、『書上』と『書付』の内容に大きな変化が見られる以上、宮川直之が貰った『書付』はただ単に『書上』を書写しただけのものではなく、萬松寺縁起としてより相応しい内容にする為に逐次書き換えられていったものであると言えよう。

さて、安永年間(一七七二〜一七八〇)に成立した『羽州山形道の記』にも、『書付』と同じ内容の縁起が記されている⁽¹⁸⁾。

千歳山万松寺へ立寄。(中略)抑此阿古耶姫は、大織冠鎌足の末孫、中納言藤原豊満公の姫君也。此国に摘居し給ふて儲給ひし姫君也。ひそかの男夜毎に通ひ馴て深く契せ給ひける。ある時姫問て此年月ふかく馴染参らせしおとは何国名は何と尋給ひけるに、名取左衛門太郎と答て、又ある夜物語に、我は此千とせ山の松の精也。然るに名取川の橋の修理に伐られ侍る。されども、魂とゞまりて引ともうごくまじ。其時里人に告へし御身出て引玉ふ時は、安々と参べしと約しけるに、はたして言葉に違はずなん有ければ、姫君を頼けるに姫僅に手をかけ給へば、安々と名取川迄引付けり。此時今の笹谷峠を通りけるに、姫此松と道々さ、やきけるにより私言峠なりしを、今下略してさ、や峠と云ならはせし也。

萬松寺を参詣した者が「書付」と同じ内容の伝説を記している事から、「書付」に記されていた縁起が一定の流布を見ていたと言える。

以上のことより、「書付」に記されていたあこや姫伝説は、萬松寺の「正統な」縁起として機能していたと言える。大庄屋である平清水久左衛門義明が製作した可能性のある萬松寺の縁起は、十八世紀後半頃までには萬松寺が一括管理する縁起となっていたのである。あこや姫伝説は、一方では古体を留める伝説も残されていたものの、十八世紀後半頃までには萬松寺の管理下に置かれ、萬松寺の縁起に相応しい内容の伝説へと整備されていたのであった⁽¹⁹⁾。

四 木霊婿入譚と中将姫説話

——明治期以降のあこや姫伝説

ここまでいわゆる豊充系（木霊婿入譚）のあこや姫伝説の形成と展開を中心に論じてきた。最後に、豊成系（中将姫説話）と、明治時代以降のあこや姫伝説の受容について見ておこう。

豊成系（中将姫説話）の初出は、菊地氏が指摘している通り、寛政四年（一七九二）成立の『乚補出羽国風土略記』に確認できる⁽²⁰⁾。

光當翁云、阿古屋姫は右大臣豊成卿の息女にて、中将姫の妹

也。其頃出羽州より夫々上京したる者有しが、暫く都に止り、豊成卿に仕へて数年を送りける折しも、豊成卿いさ、かの事ありて、流罪の身となり給ふ時、此者主君の姫阿古屋姫の御供して難をさけ、生国なれば出羽国へ逃下り、当山の麓平清水村故郷なる故、当村の民家に交り世を忍び、時を待て隠れ住しとぞ。此故に藤原系図に、豊成卿の息女菅人に何共印てなきは、当国の山中に世を忍び、隠れ住給ふ故也とぞ。異民此姫を阿古屋御前と称せしと言ひ伝へたり。姫幾程なく風の心地とて打臥給ひしか、療治不叶すでに危く見へ給ふ。末期に及んで宣ひけるは、我身むなしくなるならば、此山の頂に葬り、印に松を植てたびとて和歌を詠じ終に空敷成給ふとぞ。此歌を石碑二行に彫置けり。此末の文字は石碑かけて見えず。村老の申伝へには、消し世のあととふ松の末かけて名のみは千々の秋の月影と、詠じ給ふ歌なりといへり。家臣何某忠信の者にて、姫君の遺言の如く当山の頂に葬り奉り、印に松を植、石碑に右の歌を書印て立置りとぞ。是より此所をあこやの地と称し、松をあこやの松と云ふ。

この豊成系（中将姫説話）のあこや姫伝説は、『乚補出羽国風土略記』以外の資料には確認できない話となっている。その意味にお

いては、萬松寺が管理する豊充系（木霊婿入譚）のように、広く知られていた伝説ではなかったと言える。しかし、豊成系（中将姫説話）が、江戸時代以降に表舞台から姿を消したというわけではない。例えば巖谷小波が編纂した『大語園』には、以下のような豊成系（中将姫説話）のあこや姫伝説が記されている⁽²¹⁾。

中将姫の妹に阿古耶姫という美人があった。父親の藤原豊成が、罪を受けて遠国へ流された時、近侍の某は阿古耶姫を連れて東国へ落ち延びた。某は姫と共に苦しい旅を続けて、某生国なる出羽の平清水村まで辿り着いた。都に育つて榮華に暮した姫は、淋しい此の田舎に来て、生きる甲斐なき日を過していた。けれども忠義者の某の、親身も及ばぬ心づくしで、旅の鬱を忘れながら、再び都の家に帰る日を、今日か明日かと首長く待っていた。兎角して姫は重病の床に臥した。自分でも助からぬ命と観念して、「死後には千歳山の頂上に亡骸を埋めて、しるしの松を植えて貰い度い。」と遺言して、猶短冊を取寄せ、「消えし世のあと問ふ松の末かけて名のみは千代の秋の月影」と一首を記して息を引取った。年を経て其しるしの松は、阿古耶の松として、其名を謳われたという。

一読して分かるように、まさに『亘補出羽国風土略記』に見られ

た豊成系（中将姫説話）のあこや姫伝説が採録されている。

また『日本伝説の旅』などには、父親の名前を藤原豊成とする木霊婿入譚が記されており、豊充系（木霊婿入譚）と豊成系（中将姫説話）の融合型も見受けられる⁽²²⁾。菊地氏の指摘どおり、豊成系（中将姫説話）のあこや姫伝説は、ごく最近まで存在していたのである。しかしながら、あこや姫伝説の大勢をしめていたのは、やはり豊充系（木霊婿入譚）であった。この豊充系（木霊婿入譚）が台頭していく契機となったのは、何なのであるうか。

ここで演劇などの芸能に受容されたあこや姫伝説に注目したい。演劇や芝居に受容されたあこや姫伝説は、明治三十年代に上演された「阿古耶の姫松」を最初とする⁽²³⁾。「阿古耶の姫松」は、唐松長者・藤原豊充の娘である阿古耶姫と、千歳山の松の精霊・名取左衛門太郎を軸とした話で、実方説話および実方の娘によるはずかし川伝説が続けられる。あこや姫の出自に差異はあるものの、基本的には『書上』以来の萬松寺縁起が基盤となっている。

この「阿古耶の姫松」で注目すべきは、耕龍寺・唐松観音寺といった別の寺院の開創縁起においても、あこや姫伝説が取り込まれている点である。この耕龍寺・唐松観音寺は、山形と名取を結ぶ笹谷街道沿に位置する寺院である。この笹谷街道については、夙に浅見和彦氏が伝承の伝播経路の一つであった可能性を指摘している⁽²⁴⁾。笹谷街道沿の寺院に、萬松寺縁起に見られた要素が確認できるとい

う事は、浅見氏の指摘通り、笹屋街道が伝承経路として機能していた可能性を如実に示しているといえよう。

また昭和三十年代には、あこや姫と松の精霊である左衛門太郎との恋物語を軸としたオペレッタ「阿古耶姫」が上演された⁽²⁵⁾。ここではあこや姫の父親の名前は「大織冠藤原鎌足公の曾孫、中納言豊允卿」となっている。また左衛門太郎の菩提を弔う姿も「あこや姫ひとり弔うその名は萬松寺」とあり、内容としても萬松寺縁起に見られる木霊婿入譚と相違ない。

明治以降、木霊婿入譚と中将姫説話の拮抗状態が崩れ、木霊婿入譚のみが台頭してきた背景には、木霊婿入譚のあこや姫伝説が演劇などに取り入れられた事が大いに影響しているものと考えられる。そして演劇に受容される事で木霊婿入譚としてのあこや姫伝説―すなわち萬松寺縁起としてのあこや姫伝説は、山形固有の伝説・昔話としての地位をより一層確固たるものにしていくのであった。

おわりに

以上本稿では、十七世紀末以降に、実方説話が新たに生み出していったあこや姫伝説の形成過程からその後の展開について論じてきた。最後に本稿のまとめをして筆を擱きたい。

あこや姫伝説には、菊地氏が分類していた二系統には属さない内

容の話が原形―一条翁系(笠島道祖神縁起)―として存在していた。そしてその原形は、実方説話の影響を強く受けた伝説であった。またそれとは別に飛鳥井中納言系(貴種流離譚)も存在しており、あこや姫伝説形成当初はこの二系統が並存していた。

しかしあこや姫伝説は、十八世紀中頃に萬松寺の縁起を記した『元文二年書上』に吸い上げられる事で、豊允系(木霊婿入譚)へと変貌を遂げるのであった。この『書上』が成立した背景には、平清水村の大庄屋を務める平清水久左衛門義明の関与が想定された。

『書上』以降のあこや姫伝説は、萬松寺の管理下に置かれて、萬松寺の縁起に相応しい内容の伝説として整備されていった。豊允系(木霊婿入譚)としてのあこや姫伝説は、寺院に吸い上げられ縁起に内包される事によってその正当性が主張されるのであった。

そして明治以降には、芝居などにも取り入れられる事となる。『日本行脚文集』に譚を発したあこや姫伝説は、ここに至り正に山形固有の確固たる伝説へと成長を遂げたと言えよう。

注

(1) あこや姫の表記には平仮名表記のほか、「阿古屋姫」「阿古耶姫」といった表記がある。本稿では平仮名で「あこや姫」と表記する。

(2) 藤原実方がアコヤノ松を探す話は、『古事談』巻二や『源平盛衰記』などに収められている。

(3) 渡辺信八郎「阿古耶の松」考(『山形城北女子高等学校紀要』第三集、一九七二年三月)、早坂忠雄「千歳山と万松寺」(『むすび』第九十六号)、浦井雄治「阿古弥の松伝説考」(『月間V』四・十一、一九八七年一月)などがある。

(4) 菊地仁「歌枕(あこやの松)をめぐる在地伝承」(『木本好信編』『古代の東北—歴史と民俗』、高科書店、一九八九年)、菊地仁「伝承文学の在地性」(『福田晃・渡辺昭五編』『講座日本の伝承文学第一巻』、伝承文学とは何か、三弥井書店、一九九四年)

(5) 佐藤寛校訂『俳諧紀行全集』(博文館、一九〇一年)

(6) 松尾葦江校注『源平盛衰記』(三弥井書店、一九九三年)

(7) 『享保二酉年奥羽二州巡見日記』(酒田市立図書館光丘文庫蔵本)。なお一条翁系のあこや姫伝説は、日本各地の名所旧跡を中心に書き記した『本朝丸鑑』(国立国会図書館蔵本)や、京城孫四郎の紀行文『奥羽道の記』(国立国会図書館蔵本)にも記されている。

そのかみ名とり左衛門と云人都かよひして、一条西翁の最愛有しあこや姫とふかくかたらいけるが、いつしかかわる男ころこにふるさとへにげて来にけり。姫はうらみの一念をつえとして、三日ばかりに夫の里ちかく迄追きたるに、ほそき川の有を脛かゞぐることもはづかしく波の下をくゞりしと也。はづかし川と云。またいにしへ人に逢迄はちとせふるとも出やらじと云けるより、ちとせ山と云て松をあこやの松と云伝る。かくて姫はいらちまどいてみちのく笠嶋

にてむなしくなりけり。村人はからいなだめて、所にはふむりて道行ふりの早々しければとて、道祖神といわぬしとなん。

(『本朝丸鑑』)

ある説に天平の比、陸奥国名取郷に左衛門太郎とて在年毎に都へ登。二条西の岡宿の翁の娘あこやといひしに飯初になれ初て契深かりしに、世の人心うつろふ候は常のならひにてうとましくや思ひけん、左衛門太郎は故郷へ帰りけるに、阿古屋も二とせ三とせ待けれど、それとばかりの音づれもあらねば、待わびかなしきうちにも恨めしと思ふ心の鬼とも成べき程なれば、廿日にあまる長途を三つ四つの日に奥羽の国に來りて尋ねぬかたもなかりけれど、左衛門太郎にはあわざりける。■の松影に立よりて、たとへちとせはふれども尋ねあわぬうちは此松の下を出やらじといひしより、山を千とせといひ松をあこやといひ侍る。或人の言は左衛門太郎は名取のさとに在よしひけるまゝ、嬉しと思ひ尋ねゆきしに、二とせわ前身まかりぬと聞てかなしみにたへず、あこやも程なく狂死せり。その靈夜毎に出て里人をなやまし不思議の事のみ多く胸の走さかんにして、道行ことのさかくしきを所の者道祖神と鎮、その社名取の郷笠嶋と言所に在。

(『奥羽道の記』)

(8) 貴種流離譚としてのあこや姫伝説は、『奥羽道の記』にも確認できる。一説には飛鳥井中納言の出羽国へさすらへ侍る時、かの妻なげき

に堪へずして身まかりぬ。その娘あこやとかやいひし■の別れにひとかたならずかなしみて父にあわんと、かの国へ尋ねまかり身まかりけるまゝ、其印に植し一木をあこやの松といひならはし侍るよし。

- (9) 平清水公宣・平清水千秋『千歳山萬松禪寺誌』(萬松寺、一九八四年)
 (10) 清巖良浄については、『曹洞宗全書』(曹洞宗全書刊行会、一九七六年)に「清巖良浄 山形萬松寺」と記されている。

- (11) 金貝忠真については、『曹洞宗全書』に「山形耕龍寺五世同萬松寺一世」と記されている。

- (12) 『山形県史蹟天然紀念物調査報告』第一輯(山形県、一九二五年)

- (13) 山形市史編集委員会編『山形市史資料』第八十号(山形市、一九九三年)

(14) 一説には「十六夜姫」とも言われている。中将姫・十六夜姫ともに『尊卑文脈』には実方の娘としては確認できない。また、この「中将姫」が実方を追いかけてくる話は、山形では「はずかし川」伝説の名で知られている。この「はずかし川」伝説については、稿を改めて論じたい。

- (15) 菊地氏前掲論文「伝承文学の在地性」

- (16) 『山形市史編集資料』第十一号(山形市、一九六八年)

- (17) 『奥羽並松前日記』(国立公文書館蔵本)

- (18) 『羽州山形道の記』(国立国会図書館蔵本)

- (19) その後萬松寺では、大安良悟が住職を務めていた文化年間に『萬松寺略縁起』を刊行する。『萬松寺略縁起』は全六丁・半丁九行(但し一

丁表は八行、六丁裏は六行)で構成されている、平仮名混じりの略縁起である。内容としては、

①あこや姫伝説

②実方伝説

③はずかし川伝説

が記されている。

- (20) 山形市史編集委員会編『山形市史編集資料』第三十三号(山形市、一九七三年)

- (21) 巖谷小波編『大語園』(平凡社、一九三五年)

- (22) 武田静澄『日本伝説の旅』(社会思想社、一九六二年)には、次のようなあこや姫伝説が収録されている。

むかし、右大臣藤原豊成は、朋輩のためおとしいれられ、息女阿古耶姫をつれて、遠い山形に流された。落ちついたところは千歳山のふもと、平清水村にある長者の家だった。姫はある春の夜、琴がとりもつ縁で名取の太郎と名のる若者と人目をしのぶ仲となった。その若者こそ、千歳山頂にそびえる年古りた松の精で、近日名取川にかける橋材として、切られる運命だった。いよいよその日がきた。村人は総出で老松を切り倒した。だが、大ぜいかかっても微動もしなかった。その大木は、姫がその力綱に手をふれると、にわかにするすと動き出した。姫は、それからまもなく病をえて老松のあとを追った。そのなきがらは臨終のことばどおり、千歳山のいただきの

松の根のあたりに葬り、そのしるしに若松をうえた。その松はやがて初代の松をしのぐ大樹となった。いつのころからか若い男女が、この松の枝に紙をむすび、縁むすびのいのりをこめる民俗が生れた。姫の没年は、慶雲四年二月十六日だとつたえている。

(23) 「阿古耶の姫松」の作者である諏方武骨は、山形市蠟燭町に居住していた人物であるが、それ以外は不明である。

(24) 浅見和彦「アコヤノ松」のことども(『成蹊国文』第三十七号、二〇〇四年三月)

(25) 作者は『出羽の民話』などを編集した沢渡吉彦。なお、「阿古耶姫」の本文は『山形春秋』第三卷・第二号(山形春秋クラブ、一九五三年)に掲載されている。